

地域神社で行われる造替遷宮

櫻井治男

伊勢の神宮で式年遷宮の遷御が斎行される前後の時期に、伊勢市および周辺地域の神社、またかつての神宮領（神戸・御厨・御園等）に鎮座する社のなかには、社殿を造替する「遷宮」が行われる例が見られる。このことが気になりだし、本格的に調べることができないかと考えたのは、まず単純にこうした慣例がどの程度の広がりを持つのか、そこには神宮と何か特別の関係があるのか。また地域の神社が定期的な造替を行う意味、それが行われる時代、社会のなかで理解することを通して神社と地域社会の関係性の姿、さらに地域神社のこうした営みのなかに「遷宮とは何か」をあらためて考える材料が潜んでいるのではないかなど、いろいろな思惑からである。

こうした思いが生まれて来たのは、平成五年度の神宮式年遷宮の頃である。もちろんそれまでも、三重県内、特に南勢・志摩地方の祭りや県内の神社整理のその後の様相について調査研究を手掛けていると、「今年は遷宮の年」とか「中遷宮なかせんぐうの年」などと神職や氏子の方々がおっしゃるので、気には止めていたが、もう少し全体像がわからないだろうかと知りたい欲がでてきたのは、やはり式年遷宮の影響が大である。

さいわい、平成八年～十年にかけて「伊勢神宮式年遷宮の総合的研究」という共同研究が、皇學館大学神道研究所を中心に、文部省（当時）の科学研究費の補助金を受けて行われることとなり、そのメンバーの一員として、筆者は同僚の斎藤平先生とともに三重県下の地域神社の

社殿造替を伴う定期的な遷宮の実施状況を調査する機会を得た。

それは、県内神社八二五社を対象に、定期的造替の行われている神社から、十二項目にわたる質問について質問票への回答をいただき、基礎的情報を得るというもので、追加調査として再度、実施の有無をお尋ねし、併せて実地調査を試みたものである。結果的には二〇九社での実施ということで、約二十五%の神社で行われているとの情報を得た。

この結果が、多いか少ないかは、回収率の問題や他に比較する数値がないので判断はできないが、三重県内でも実施率の高いところと低いところがあり、概ね神宮鎮座地の伊勢市及び周辺部と、一部、旧の参宮街道沿いの集落に多くみられるという傾向が見えてきた（『研究成果報告書』課題番号〇八四五・一〇七八、平成十一年三月参照）。

○

こうした分布状況は、伊勢の神宮における式年遷宮の慣行が、周辺地域へと波及したことも十分に考えられるが、一方で旧伊勢国からいくつもの峠を隔てた西北の旧伊賀国、かつての名賀郡内（名張市・伊賀市青山町）でも実施率が高いという結果も現れ、単純な分布論では説明できない状況もうかがわれた。

旧名賀郡、中でも名張市では神社本庁傘下の神社三十一社（当時）全てで実施されており、その呼び方もゾウクと称され、一つの特徴を示すものであった。当該地方の神社社殿の形式は、春日造や流造が多く、伊勢神宮の影響下では神明造が多いなかでは異質である。この点、さらに西方に隣接する奈良県東部の地域では、造替遷宮のことをゾウクと通称されていることや、社殿形式が奈良市の春日大社を代表とする春日造の神社が比較的多いことなど、二十年ごとに造替慣行の採られていた春日社の影響も考えられるところであった。

このような結果が得られた時の平成十年四月、筆者は名張市に開設された皇學館大学社会福祉学部（平成二十二年伊勢キャンパスへ移転）へ赴任することとなり、それがきっかけで市内各所の神社祭礼や民俗行事の調査を行う機会に恵まれた。通い始めた最初に出会ったのが、滝之原地区の龍王宮という神社のゾウクであった。この地区は、生活単位として上出・中出・下出という三つのコバ（小場）と称する小地域に区分され、滝之原地区の神社といえは下出の国津神社を指すが、上出には龍王宮、中出には八幡神社という共同奉斎の社が存在している（『三重県祭礼行事記録調査報告書 八幡神社の若子祭』平成十五年、名張市教育委員会）。こうした状況は、明治末期

の神社整理の影響によるが、龍王宮は、コバの集会所と観音寺が一体となった境内域の一面に鎮座する小さな春日造の神社である。定期的な造替遷宮に預かる慣例で、その営みは決して小さくはなく、コバあけての一大行事となっている。

「遷宮行事」の全体は、「下遷宮」「造宮工事」「上遷宮」「奉祝祭」から構成され、社殿造営に先立ち、神霊を別の場所へ遷す「下遷宮」、そして新造の社へ奉斎する「上遷宮」の様子は、当時、肌寒くなった夜の現場にいた者にとって、極めて神秘的でもあり、近寄りがたい雰囲気につつまれていた。神職の指示に従いながら、略礼服に白手袋とマスクを付けた役員の方々が、威儀の物や「お宝」と呼ばれる旧社殿に納められていた伝来の物を持ち、絹垣に囲まれた神儀を遷す御列の様子は、厳粛裡に執り行われる。そして翌日は遷座奉祝祭が斎行され、晴れやかな場が現出する。

その後も、こうしたゾウクの様子は、折ごとに市内で体験する機会に恵まれたが、基本的な祭儀の構成や様相は共通している。各社に伝来の品々の内容は知り得ないが、それらの中には棟札が多数含まれていることが多い。各社の棟札については、『三重県神社誌 三』（大正十五年、三重県神職会）に紹介されているが、ゾウクを機に名

張市では市史編纂の一環として、神社のご了解を得て精力的に棟札の記録化が進められている。

○ 龍王宮での奉祝祭は、他の神社では「遷宮祭」とも言われるが、これらの内容がいささか特徴的で、既に神儀は「上遷宮」で新殿へ遷されているが、凡そ市内各地区の神社では、オワタリ・上棟祭という行事から成り立っている。オワタリとは、神職・造宮委員・大工棟梁等工事関係者・子ども（稚児）達が、地区内のしかるべき場所（多くは造宮委員長宅）から神社まで行列を仕立て、地区内をめぐるものである。そして上棟祭では神職や大工棟梁による上棟儀式とともに所役の子どもたちが木槌で棟木に擬した用材を叩く儀が行われる。それら一連の儀式が終了し、特別奉賛者などによる餅撒きが華やかに実施され、終日境内が振る舞い酒に酔いしれる人々で賑わいを見せるといった内容である。この日には、地区を出て他所で住む家族や親族が集い、二十年ぶりの交流を深める機会ともなっている。

上遷宮とオワタリ、上棟行事、奉祝祭などが一連のものとして行われるのであるが、このスタイルがこの地域の遷宮祭なのである。オワタリとは、こうしたゾウク時だけのものではなく、毎年の秋祭りでも宵宮に行われる

儀式で、御幣等を捧持してトウヤ（当屋・禱家）から神霊を神社へ遷す形式をとり、隣接の奈良県地域でも見られるところである（辻本好孝『和州祭祀記』、昭和九年）。また子どものも所役で用いられた木槌が、玄関の軒下に掲げられていることも、名張市南部の奈良県曾爾村あたりで見かけたことがある。

地域神社のゾウクでは、本殿を新たに造替するには、費用的になかなか大変なことである。そのために、建物の補修や垣・鳥居・小宮・社号標の造り替え、社殿の塗り替えなど、廻ってくる時期の状況によりその範囲が選ばれるが、すべて新たに造り替えることが本来的かどうかは必ずしも明白ではない。江戸時代の棟札には「皆造宮」などの表記もあり、まったく新造することを前提として、こうした行事を捉えることには慎重さが必要ではないかと思うところもある。

さて、費用の点であるが、名張市の各社では、毎年の祭り（秋祭りを中心である）では、氏子の家ごとに家族数が「改め」（確認）られる。古い祭祀記録にはゼンカリ（膳狩）などとも登場するが、祭の場で用いられる人数分の膳碗を集落が保有し、それを当番が借り出す慣例をとってきたことと関係する。いずれにせよ、毎年の「改め」は、氏子が供出する米や当番の田が保有されている

場合は、その田から得られる米を以て餅が調えられ、それが各家へ人数分配されるとともに、家族は地区外に住む家族（これを外氏子そとうじこという）へも、神社のお札とともに渡すという仕組みがとられている。今日、少子高齢社会のなかで、こうした慣行をとることが難しくなり、餅の代わりに米としたり、配分を地区内（内氏子）に限るなど縮小されるところもある。しかしながら、このような毎年の関係性の確認という積み重ねが、二十年ごとのゾウクの募財に機能してきたことも注目されている（このことについては、関沢まゆみ『宮座と老人の民俗』〈平成十二年、吉川弘文館〉で名張市黒田の事例が分析されている）。

○

伊賀方面の場合とは異なり、「旧伊勢国」地方の地域神社の遷宮について、平成五年の神宮式年遷宮の頃に調査したところとして、神宮の近傍では、度会郡御菌村（現、伊勢市）の御菌神社（王中島町）・上長屋神社（長屋町）・二木神社（小林町）、宮本神社（佐八町）・八柱神社（津村町）・高羽江社（東豊浜町）などがある。これらの地では遷宮のことを「御大儀ごたいぎ」と称している。神社の中には、昭和二十四年の神宮式年遷宮が、同二十八年に齋行されたことに、神宮よりも先に行われることとなり、神宮の古材を受ける慣例に預かることが無くなった神社も

存するといわれる。一方、四日市市高角町の神前神社のように、神宮の遷宮後に外宮の鳥居古材を受けて定期的な遷宮が実施された（平成六年）例もある。高角町では、町内を奉曳車に乗せた御神木が廻り、「お木曳き」として大きな祭りごととなっている。

平成三年十二月に行われた度会郡大宮町（現、大紀町）野原の七保神社の御大儀も、今では印象深い行事である。この地は、明治期に一村神葬祭化した集落であるが、明治末期の神社整理では「七保村」の中心神社として、各字の神社が七保神社としてまとめられるという歴史をへている（拙著『地域神社の宗教学』平成二十二年、弘文堂）。もちろん遷宮には当社に合併された各地区からも経費が寄せられるのではあるが、遷宮を機に旧来の社名「野原神社」の木製社号標が七保神社の社号石とは別に建てられた様子を見た時には、「ムラの神」とムラ人との強い関係に思いを馳せたところであった。

ちょうど、野原神社の遷宮奉祝祭の時に、近隣の大宮町金輪でも御大儀が行われていると伺い、その様子を拝見に出かけたところ、小さな社殿が新たに造営され、住民の方々が宴席を設けての歓談も終わりがけの頃であった。旧殿の用材はその場の暖をとる焚火としてやがて燃え尽きようとしていた。しかしながら、ムラの方々は、

突然の闖入者にもかかわらず、自分たちの神様の遷宮について話をして下さった。

あれから二十年余を経過した。各集落での遷宮がどのようなになっているのか気になるところであるが、再訪した地域神社のなかには神職の方々や神社総代、氏子の皆さんが、そのことに努力を傾けられてきた場面にも出あっている。その一方で、少子高齢社会の進行は一段と加速している。伊勢の遷宮を迎えた今、あらためて地域神社の遷宮とは何かを一つひとつ問いかける営みが課せられているように思う。

（皇學館大学文学部教授）